

信濃川大河津資料館友の会だより

お茶を楽しむ会

昨年、一昨年と多くの方からお茶を楽しんでいただき、大好評だった“お茶を楽しむ会”を開催します。4F展望室から大河津分水路や桜を見ながら一服いかがですか？

日時：4月19日（土）10：00～14：00

会場：信濃川大河津資料館4F

～紙芝居のお知らせ～

当日は、11：00 から友の会会員の片桐さんより大河津分水の紙芝居をご披露いただきます。皆さんぜひお集まり下さい。



おいらん道中と大河津分水の桜を写真で紹介！！

大河津分水の桜は、明治43年頃から大河津分水工事を記念して植えられました。その桜並木の下で繰り広げられる「分水おいらん道中」。おいらん道中の歴史や大河津分水に咲く桜の見所などをご紹介します。なぜ大河津分水に桜があるのか。この機会に改めて考えてみてはいかがでしょうか？



今号の可動堰

現在、堰柱及び取付擁壁の工事が行われており、少しずつ堰柱の形が出来上がってきました。足場や仮囲い、シートなどで覆われているために分かりにくいですが、中の堰柱は周囲の景観に調和するように桜御影石風の化粧が施されています。

新可動堰完成に向けて、可動堰周辺の定点撮影を紹介します。



右岸堰軸から撮影
(平成20年3月22日撮影)



右岸堰軸から近景を撮影
(平成20年3月22日撮影)



信濃川、大河津分水に感謝

友の会会員 山田 正義

日本一の信濃川、そのほとりに生まれ育ち、その雄大な流れが自分の誇りであるかのような思いで今までの人生を歩んできました。

子供の頃、父と一緒に渡し船で対岸の馬越、岩方山(向かい山と称した)へ山菜採り、栗拾い等が懐かしく思い出されます。また当時は、夕方になると向山から拾い集めた杉枝や薪等を背負った人達が連れだって渡し船で帰ってくる。船に乗り遅れると対岸の船頭に向かってオーイ、オーイと大きな声で呼ぶ!本当にのんびりした人情味溢れる情景でありました。

私たちの時代に信濃川の恐怖というべき大きな災害がありませんというのも、大河津分水のお陰であります。たとえ大増水しても分水があるから大丈夫、この堤防が破堤する筈がない、という楽観的な気持ちで過ごしてきたことは事実であります。しかし、この分水ができる以前の信濃川沿岸の水害というものは物凄いものであったと言われております。

私たちが代々言い伝えて聞いている大惨事に《館興野切れ》があります。(館興野とは、現在の中之島中条と真野代新田の中間点に位置する)明治29年7月22日、中ノ島村史によれば、猿橋川、刈谷田川、信濃川3本の川に囲まれた中ノ島村はいたる所で破堤し、宿命的な水害地となった。当時の新潟新聞で中ノ島村での破堤箇所20数箇所、中でも破堤長さ150間(約270m)という村内最大の切れ所となった信濃川沿岸の中条館興野からの濁流は凄まじいものであったという!

昭和30年に田の耕地整理が行われ、従来大きなはざ木が撤去されました。その水害の切れ所だったという館興野一帯は、なんと、木の根が2段になっている部分が多くありました。年配者いわく、館興野切れの時大量の土砂が一举に流れ込み、草木は埋没してしまいました。しかし生物の生命の強さで再び根を張り芽を吹いたのだらうという、当時の水魔の物凄さと同時に生物の生命力の強さに驚きます。

この館興野切れと同じ明治29年7月22日、西蒲原郡横田の破堤口からの濁流は西蒲原一帯を浸し、新潟市まで一面泥海と化したと記されています。世に有名な横田切れであります。横田切れと中条館興野切れとは全く同じ時の災害だったという事は今初めて知った私ですが、信濃川沿岸による県下全域での大被害は凄まじいものだったという事です。その翌年もまた大洪水となり2年連続の大惨事が、大河津分水工事の決定、着工の引き金になったと言われております。

分水工事完成の後には蒲原平野一帯が美田と化し、県下有数の米所となっている。これは大河津分水のお陰であることは言うに及びません。心から大河津分水に感謝致します。



堰から眺める信濃川

友の会会員 松井 健太郎

信濃川が当たり前の存在だった新潟を離れ二年。川に水がない香川で暮らすと、大量の水が流れる大河津の風景がとても恋しくなります。

子どものころ、私は洗堰を渡るのが好きでした。洗堰から下流を向いて本川橋を眺めると、大きな船がスクルーで水をかいて進むような感覚がするのです。

水がかき混ぜられ、白く泡だって大きな音を立てる姿は、普段見る信濃川と全く違います。特に、水が大きな塊のようになって流れていく魚道の様子は圧巻で、ずいぶん大人になるまではおそろおそろ眺めていました。

そんな洗堰も保存されてみると意外に小さく見えて不思議です。新しい洗堰は通路と水面の距離が違うせい、霧囲気がだいぶ違います。今は魚道観察室が新しいお気に入りになりました。

分水路に横たわる可動堰も、渡ってみたいとあこがれていました。対岸にいけなないのだから仕方ありませんが、「なぜ可動堰は普段渡れないの」と父に尋ねたことさえあるほどです。

「友の会だより」で新しい可動堰の工事状況を読むたびに、宮本武之輔が設計したという今の可動堰を間近で見る機会は失われるのか、と感じてしまいます。今もまだ「渡れない可動堰」にあこがれているのかもしれない。

次のご指名は原銑之助さんと吉川由利子さんです。